

主の洗礼

福音朗読 ルカ 3・15-16、21-22

2025.1.12 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日、わたしたちは主の洗礼の祝日のごミサをお捧げしています。

イエス様がヨルダン川でみんなと同じように洗礼を受けられた。今日の福音の朗読ではその場面が読まれたわけですが、この洗礼の場面というのは、イエス様の誕生の物語と、それから、人々の前に公に姿を現わして神様のことを宣べ伝え始める、いわゆる公生活との間に位置していて、転換点とすることができます。そして典礼のカレンダーでも、その主の洗礼までイエス様がお生まれになったことをお祝いする降誕節を過ごしてきましたけども、明日から年間が始まる、そういう切り替えの時期になってもいるわけです。

主の洗礼の場面では、イエス様がどのような方なのかということがまず示されている。それが天からの声で「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に^{かな}適う者」(ルカ 3・22)という、イエス様が父である神様の愛する独り子なんだということが——これはルカの福音書では読者に向かってですけど。人々の前ではまだ明らかにされてない——示されると同時に、それだけではなくて、そのイエス様がこれからなさろうとすることが何かというのが、今度はヨルダン川で罪から清められる必要がある他の人と同じようにご自分も洗礼を受けたということを通して人々の中の一員になる、人々と一体化することを通して、ご自分に向けられた「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」っていうその神様の呼びかけがイエス様を通して、イエス様だけではなくてすべての人に届くように働かれる。そういうイエス様がどういう方であるのかと同時にそのイエス様が何をなさろうとしているのかっていうのを示しているのが、聖書ではこの主の洗礼の場面だと言うことができるんです。

また、まだここに足りないことがあるとすれば、ではそのイエス様はその父である神様のみことば、「あなたはわたしの愛する子」っていう言葉を誰に届けようとされるのか、それがご自分を受け入れる者だけではなくて、拒絶する、排斥

する者にもその言葉を向けられてるんだということを表すのが、十字架の場面ですから——主の洗礼のこの場面ではそこまでは言われてないけども——わたしたちはミサのたびごとにそれを思い起こして記念していると言うことができます。

そして、この主の洗礼の場面では父と子と聖霊の三位一体のすべてが揃い踏み、三者が登場しているっていう、聖書の中の非常に数少ない箇所なんです。父である神様の声が聞こえた、その前に聖霊が鳩のように^{くだ}降った、イエス様が洗礼を受けたっていう、イエス様、^{おんこ}御子とそして父である神、^{おんちち}御父と聖霊が全部その場面に出てくるっていうところで、教会の中では——聖書は全部大切ですけども——特に大切な場面というふうにされてきたと言っているんです。

これは、ただそこに登場してるっていうだけじゃなくて、父である神は御子を愛し、父である神はすべてを御子に渡し、御子はすべてを受け取り、また受け取ったものをすべて父である神に捧げるっていうそのつながりだけではなく、今度は聖霊を通して、父と子が互いに向き合っているだけではなく今度は同じ方向を向いて、お造りになった被造物、特に人間をその交わりの中に招かれると言いましょうか、父と子が互いに愛し合うだけではなくて、父と子が今度は共に人間を愛されるんだっていうのが聖霊を通して、象徴している神秘であると言うことができます。父と子と聖霊の交わりの中に人間が招かれている。

で、今日の福音ではその招かれた人の代表として、洗礼者ヨハネがその神様のご計画の協力者として働いているわけです。ヨハネっていう名前は「主は愛」っていう、そういう意味を表しているということなので、まさにこの父と子と聖霊の愛が何であるのか、そしてその中に招かれるときにわたしたちの中にも愛が完成する、それこそが人間が造られた理由なんだということが——だから全部が示されてると言ってもいいんです、今日の箇所には。

で、わたしたちも今日、成人のお祝いもするし、教会の中でその父と子と聖霊に招かれているっていうことを改めて思うときに、愛は互いに愛し合うと同時に、共に他の誰か^{ほか}に向けて、他の誰か^{ほか}を愛するっていう、この二つの方向によって完成されるということを思い出す必要があるんです。教会がそういう互いに大切にし合い、そしてまた共に他の誰かのために他の誰かを愛するということを体験する、そして実行する、そういう場であるように神様のお助けを願いたいと思います。

人によっては、一緒に過すって互いに向き合って交流を深めるということ、そういう愛がピンとくる人もいるし、一緒に同じ方向を向いて共に働くことを通して関係を深めるってということがピンとくる、そういう方もおられるかもしれない。でも、どちらが、ということではないんです。互いに補い合いながら完成できたらいいなって思います。教会の活動も信者同士の交流を深めるとともに、その信者が共に他の誰かに向けて働くことができれば、それこそが父と子と聖霊を表している共同体とになっていっていると言うことができるんです。どっちがいいとかではなくて——互いに足りないという、裁き合うのではなく、補い合いながら——わたしたちが今自分たちがどのような状態かなっていうのを振り返る基準に、父と子と聖霊の交わり、そしてその交わりにわたしたちをお呼びになっているっていうことを考えたらいいなって思います。

だから、ミサの最後の時には「父と子と聖霊の祝福が皆さんの上にありますように」って司祭はその言葉で祝福をいたしますけれども、それはただの呪文ではなくて——呪文によってみんなにいいことが起こればいいなあっていうことではなくて——、わたしたちが父と子と聖霊のように互いに大切にし合う、そして共に他の誰かをついていうその動きがわたしたちの中にも実現しますようにという祈りであると言うことができると思います。

それぞれ——繰り返しますけど——、一緒に向き合っていることがピンとくる場合もあるし、共に働くってということがピンとくる場合もあるし、またわたしたちが接する人で、その人と「一緒に過ごしているならばいいんだけど、一緒に働くとなるとちょっとなあ」っていう人もいるかもしれないし、「一緒に働いている時にはとてもいいパートナーなんだけど、じゃあ二人で過ごすとなるとちょっとやだな」っていう、そういう関係もあるかもしれないんだけど、でもそれはわたしたちがそれぞれ、神様の恵みによって、足りないところを補っていただき、また互いに補い合いながらという、そこに呼ばれているしるしでもあると思います、互いが完全ではないということがね。でも恵みの中で、そのためには神様がいくらでも助けて、そしてわたしたちの中に無いものをご自分の恵みで満たしてくださるんだという信頼を新たにしたいと思います。

今日わたしたちが父と子と聖霊の名によって集められ、そしてイエス様と共にあるために聖霊の恵みによって洗礼を受けた、一人ひとりが呼ばれそしてそれに答えようとしている、その神様とのつながり、そして神様を通して与えられ

る互いのつながりに中に改めて目を開き、そして神の助けによってその父と子と聖霊の招きがわたしたちの中に実現していきますように、このごミサを通して互いのためにそして誰かのために恵みを祈り合いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>